令和５年度　地域づくり海外調査研究事業調査報告書

地域資源を活用した観光振興と環境保全の両立について

調査地：スイス
調査日：令和５年９月 10 日～9 月 17 日

一般財団法人地域活性化センター
企画・人材育成グループ　　横山 泰成

目次

1.はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

(1)　近年の日本の社会情勢
(2)　観光振興と環境保全の両立

2.秋田県にかほ市について・・　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

(1)　観光と環境保全の取組
(2)　観光と環境保全の課題

3.　調査研究地の選定理由・調査研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

(1)　調査事例　ツェルマット

4.　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

(1)　観光ビジョンの策定について
(2)　ガイドについて

5.おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

6.参考文献・参考資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

1. はじめに

（１）近年の日本の社会情勢

現在、我が国においては少子高齢化と人口減少が進行しており、地域経済の縮小や地域活力の低下が課題となっている。特に地方においてはこれらが顕著であり、これらに歯止めをかけることは容易ではないことから、交流人口・関係人口の拡大による経済循環の拡大及び地域の活力の維持・発展が必要とされている。

こういった状況を踏まえ、国は、交流人口・関係人口を拡大させる方策の一つとして、観光による地域の活性化を目指す「観光立国推進基本計画」を定めた。観光振興は、観光客を地域へ呼び込み、住民と観光客の交流を促し、地域の飲食業や宿泊業、サービス業等の広い業種を通じた地域経済の活性化に寄与する。加えて、地域の魅力発信や地域住民の活動により、住民が自分たちの地域に誇りと愛着を感じることは、地域の活力の維持・発展につながるものと考えられる。

（２）観光振興と環境保全の両立

観光振興においては、地域の限りある資源を有効活用するとともに、将来にわたり地域資源を維持していく持続可能な取組が求められている。これを実現するためには、地域資源を磨きあげるだけではなく、環境に目を向け資源の保全を図ることが重要である。

昨今の観光は、新型コロナウイルス感染症が観光業界に与えた悪影響からも回復しつつあり、観光客も増加傾向にある。一方で、観光客の受け入れ体制が整っていない地域で過剰な受け入れによって、観光客のマナー違反等により自然環境が破壊されたり、住民の生活が脅かされたりするなどのオーバーツーリズムが発生している。それを防ぐためには、地域の特性や受け入れ可能な観光客数を踏まえた観光計画の策定や観光統計等のデータに基づき観光客の流入をコントロールするなど、地域の自然や文化資源を保護するための取組が必要である。しかし、環境保全を優先するあまり、規制を厳しくしすぎると観光客の足が遠のくことも想定される。現代の観光振興は、環境保全とのバランスをとりながら実施していく必要がある。

そこで、今回の海外調査研究では、地域資源を活用した観光振興と環境保全を図る取組について調査し、派遣元における観光振興と環境保全の両立実現につなげていくことを目的とした。

2. 秋田県にかほ市について

筆者の派遣元である秋田県にかほ市は、秋田県の南西部に位置し、西に日本海、南には鳥海山があり、豊かな自然に恵まれた市である。人口は 22,585 人（2023 年 10 月 31 日現在）で、2005 年に当時の仁賀保町、金浦町、象潟町が合併して誕生し、面積は約 241.13k㎡である。

標高 2,236ｍを誇る日本百名山の鳥海山は、9 種類の登山ルートを有し、春から秋にかけて多くの登山客が全国各地から訪れる山である。また、鳥海山の積雪、雨水等が長い年月をかけて大地に浸み込み、市内の至るところから湧き水として湧出している。その湧き水は、豊かな農水産物を育み、元滝伏流水や獅子ケ鼻湿原（天然記念物）などの観光スポットを形成している。

（１）観光と環境保全の取組

①自然を生かした取組

にかほ市では、豊かな自然を観光客にも楽しんでもらおうと国内最大級の総合アウトドア企業と連携し、にかほ市内全域のアウトドアパーク化を目指している。具体的には、自然と楽しむための用具（ウェア、登山用具、自転車、e-bike、シーカヤック、サップ、キャンプ用品等）の販売・レンタル、アウトドアアクティビティ（体験型観光）を楽しむためのガイドの充実、周遊ルートの確立を行っている。これにより、にかほ市を訪れた誰もが気軽にアウトドアを楽しむことができ、訪れた人ににかほ市の魅力を体感してもらうことができる。これらの拠点となる施設を現在建設中であり、アウトドアアクティビティへの案内の充実など今後の発展が期待されている。

②広域連携による取組

鳥海山は、秋田県由利本荘市・にかほ市、山形県遊佐町・酒田市にまたがるため、３市１町で協力し、鳥海山を核とした広域連携を図っている。主な活動としては、環鳥海地域連携事業実行委員会を立ち上げ、周遊ルートの確立や観光パンフレットの作成を行っている。

③鳥海山・飛島ジオパークの取組

鳥海山及び飛島を一つのエリアとして、日本ジオパークの認定を受けている。「日本海と大地がつくる水と命の循環」をテーマに、鳥海山の溶岩と岩なだれによって作り出された景観や日本海と鳥海山が生み出す水の恵みを感じられるほか、飛島の大地の歴史と文化を楽しめる「海」「山」「島」のジオパークである。こちらも前述した 3 市１町が連携して取り組んでおり、2016 年に日本ジオパークの認定を受けた。日本ジオパークは、4 年ごとに再審査を受ける必要があるが、再審査では 4 年間の取組が高く評価され 2020 年に再認定を

受けている。これを契機に、更に高みを目指すためユネスコ世界ジオパーク認定へ向けた取組を進めている。

④環境保全の取組

にかほ市では、住民の生活環境の向上、観光振興等による地域の活力向上に資するよう、良好な景観の保全・形成を図ることを目的に、景観法に基づく「にかほ市景観計画（以下「景観計画」という。)」を策定している。景観計画では、地域の特性に合った良好な景観を形成していくため、景観特性ごとのゾーン区分を行い、それぞれのゾーンの景観形成方針と規制を設定し、地域の特性に応じた景観保全や産業振興を図っている。このように、景観計画に基づき、地域の特色に根ざした景観まちづくりを推進している。令和２年３月には、市民の生活環境やまちへの愛着心の向上及び地域社会の健全な発展に寄与することを目的に、「にかほの景観を守り育む条例」を制定した。

（２）観光と環境保全の課題

①意識の共有について

にかほ市の観光事業は、市内主要観光施設の運営をはじめ観光地の整備など行政主導で行っているものが大半である。行政が定める計画や戦略に関しても、設定する目標値は観光客入込数がほとんどであり、宿泊者数の増加や消費額の増加に向けた具体的な目標値は設定されておらず、一過性イベント等の開催だけで、持続可能な取組はほとんどできていない。これらは、行政側だけで計画や戦略を策定していることや、民間事業者を含めた観光統計データを一元化、共有できていないことが主な原因である。また、地域の観光に関する現実的な方針や目標、目的、地域の将来像が定まっていないため、事業ごとに目的が異なり、行政と事業者が連携できていない。行政と事業者が集う場はあるが、中長期的な計画や地域の将来像、持続的な取組について話すことは少ない現状もある。にかほ市には、官民連携による詳細な観光統計データの共有及び計画や戦略、具体的な将来像の策定等による地域の観光振興に対する意識が共有できていないという大きな課題がある。

②住民との関わり

前述したとおり観光は、地域の交流人口・関係人口を拡大させ、地域経済の活性化を図る方策の一つである。これを実現するためには、住民が観光振興に関与し、観光客と関わりをもつことが重要である。しかし、にかほ市の現状は、住民が観光振興に関与する機会が乏しい状況にある。住民が観光に関与することにより、地域への愛着や地域資源の理解、環境保全の重要性に気づくきっかけになり、ひいては観光振興による住民が求める地域の実現につながるのではないか。

③ガイドの在り方について

にかほ市では、観光ガイドは存在せず、ジオガイドのみ存在している。観光ガイドは、観光地や飲食店、物販等のガイドを行うのに対し、ジオガイドはジオパークを訪れた人に学識的な視点から解説を行うものである。観光ガイドは、にかほ市観光案内人協会の会員がその役割を担っていたが、会員の高齢化や担い手不足が進んでいた上に、ジオガイドとの競合により会員の数が減少し、にかほ市観光案内人協会は 2022 年に解散している。それ以降、観光ガイドと呼ばれるものは存在せず、観光ガイドをかつて行っていたジオガイドが個人的に観光ガイドを行っている。一方、ジオガイドについては、鳥海山・飛島ジオパーク事務局が窓口となり、3 市 1 町をエリア分けし、派遣している。また、鳥海山・飛島ジオパーク事務局では、定期的にジオガイド養成講座を開催し、初級から上級まで区分を設け、ガイドへの入口を広げながらジオガイドの育成に注力している。

現在は、観光ガイドができるジオガイドがいるにも関わらず、観光ガイドとジオガイドという目的の違いにより、観光客が気軽に利用できる観光ガイドがいない状況に陥っている。

④環境保全について

景観計画を策定し、建造物の規制等を行うことにより景観を維持することにつながっている。しかし、住民の具体的な活動には結びついておらず、住民の環境保全に対する意識醸成は実現できていない。

３．調査研究地の選定理由・調査研究内容

スイスには、起伏に富んだ雄大で美しい自然景観や固有の文化景観がある。スイス国土の 60%を占めるアルプス地方では、居住地域の自然や農業、歴史、文化を観光資源として有効に活用し、登山・ハイキングやスキー、トレイルランニングなどアクティビティが盛んである。また、「旅行・観光競争力レポート 2019」では、環境持続性の項目が世界 1 位になるなど、観光と環境保全の両立を実現している。また、ユネスコ世界ジオパークの活動が始まる前から、国内の自然の保護・保全を考える学会活動が行われているなど、環境保全にいち早く取り組んでいる。その中でもツェルマット地域（以下「ツェルマット」という。）は、雄大なアルプスの山々や氷河を有し、豊かな自然で旅行客を魅了しながら、ガソリン車乗り入れ禁止（カーフリー）などにより、アルプスの環境保全を図っている。各施策を実施するに当たっての合意形成は、行政主導ではなく、住民による自治組織「ブルガーゲマインデ」を中心に行っており、住民による観光振興及び環境保全が浸透している。また、観光客の満足度は非常に高く、観光客の約 7 割がリピーターだという。

以上を理由にツェルマットを調査地とし、観光振興と環境保全を両立するポイントにつ

いて調査研究を行った。

（１）ツェルマット

ツェルマットは、秀峰「マッターホルン」の麓に位置し、スイスの都市チューリッヒから鉄道を乗り継ぎ 3 時間 30 分程で到着する。人口は 5,407 人（2020 年 11 月 1 日現在）で、面積 242.9k ㎡でにかほ市とほぼ同面積、標高 1,620 mあたりに位置する地域である。宿泊客は年間約 200 万人おり、主に夏は登山客、冬はスノーリゾートとしてにぎわう地域だ。決して、土地条件には恵まれていないこの地域に世界中から観光客が訪れている。

ツェルマットの位置図

①自治組織「ブルガーゲマインデ」

スイスの山奥に位置するツェルマットは、他地域と経済圏を形成することが難しいため、住民たちが自ら地域循環型の経済圏を形成している。住民には、地域を持続可能な形で後世に残し、地域内の利益を最大化することが重要であるという意識が脈々と受け継がれている。その活動の中心にあるのが、住民による自治組織「ブルガーゲマインデ」である。ブルガーゲマインデとは、ドイツ語で住民・市民を意味し、行政機関とは異なる住民主体の自治組織である。ブルガーゲマインデは、地域内のホテルや飲食店への出資を行っており、地域の事業者を支えることで、地域内の雇用維持に貢献している。また、ブルガーゲマインデは、地域内の遊休地等を多く取得している。これにより、景観維持や乱開発の防止、観光ルートの策定、ルート整備を実現している。これらの取組は、観光のためにではなく、あくまで住民の生活を守り、豊かにするために行われている。

ブルガーゲマインデが経営するホテル

ツェルマット内の観光においては、ブルガーゲマインデ、ツェルマット観光局（以下「観光局」という。）、観光関連事業者が、観光局が集めた観光統計データ等をもとに協議し、地域全体としての意思決定を行っている。地域内の同業者による連携は、お互いの利益が相反すると思われがちだが、地域の利益を最大化することを共通認識として持っているこ

とから対立ではなく、共栄共存のため同じ方向を向いて事業展開している。また、ブルガーゲマインデは多くの住民により構成されていることから、地域の活動のほとんどに住民の意思が反映されていると言える。

②リピーターの獲得

ツェルマットのような地域循環型の経済圏を維持・発展させるためには、地域内の循環に加えて、外貨を獲得することが重要である。そのためには、地域内での消費額を増やし、長期的に安定を図る必要がある。限られた観光資源を有効活用し、観光客に少しでも長く地域内に滞在してもらうことで地域内消費を促し、高い顧客満足度を実現することでリピーターを確保していくことが重要である。リピーターは、地域を定期的に訪問し、滞在中は地域内で消費することから、地域に長期的な安定をもたらす。このリピーターを確保に必要な顧客満足度を高めるためにツェルマットでは、自然を活用した体験メニューにより滞在時間を延ばし、ガイドによる案内の充実を図っている。観光資源をただ見るだけでは、顧客満足度は高まらないが、体験メニューやガイドの充実を図ることで、その季節だけの体験やガイドとの出会い、その時だけの案内という付加価値を観光資源に付けて観光客へ提供し、観光資源の価値と顧客満足度を高めている。ガイドの案内は、利用者のニーズやレベル、滞在時間、季節に応じて様々なコースやメニューを用意することで利用者の高い満足度を実現している。この満足度が、「次回は別のコースを回りたい」「違う季節に体験したい」「違うレベルを体験したい」というリピート意欲を高め、リピーターの獲得につながっている。また、ガイドは、リピーターを獲得して初めて一人前のガイドと認められる。そのため、ガイドは、「またこの人（ガイド）に案内してもらいたい」と観光客に思われるように、確かな知識を蓄積し、観光客へ寄り添っている。このガイドの活躍によるリピーターの確保は、地域に長期的な安定をもたらしていると言える。さらに、リピーターによる周囲への口コミは、「リピートするほどに良い場所」という実際に訪れた感想に基づくものであり、なににも代えがたい信頼できる情報として広まり、また地域を訪れる新規顧客が増えていくという好循環を実現している。そして、ツェルマットでは、何度も地域を訪れるリピーターに対して、その証であるバッジをプレゼントしており、そのバッジをつけているリピーターは地域中から歓迎され、より親密なおもてなしを受ける仕組となっている。これは、地域としてそのバッジの価値を住民と事業者が共有し、リピーターを大切にする意味を理解しているから実現できることであり、地域

ツェルマットの通り

が一体となって観光客を受け入れていることがわかる。

③ツェルマットの街並み

ツェルマットにたどり着いて抱いた率直な感想は、美しい街、ということだ。見渡す限りの雄大な自然に加え、ゴミがほとんど落ちていない。さらに、多くの建物の窓際には、きれいな花が飾られており、観光客は街に降り立っただけで、「この街から歓迎されている」という気持ちになる。街の清掃については、ブルガーゲマインデが関与しており、地域の事業者に清掃を委託し、清掃とゴミの回収の頻度を高めることでゴミのない街を維持している。これも地域循環型の経済を意識した取組である。また、随所にゴミ箱が設置されているほか、ペットの排せつ物を回収するための袋が無償提供されている【写真 1】など、誰もが適切にゴミの処理をしやすい環境を整えていた。建物内の花【写真 2・3】については、所有者が観光客を街として歓迎する気持ちを込めて、自主的に飾っている。ここにも地域が一体となって観光客を受け入れているという姿勢がうかがえる。

【写真 1】道路や公園に設置されていたペットの糞回収袋とゴミ箱

【写真 2】駅前広場に飾られた花

④地域のブランド化

スイス国内では、スイスの国旗があしらわれたスイスブランドの商品が多く販売されているが、ツェルマットではマッターホルンのマークが入った商品も販売されている。このマークが入った商品は、ツェルマット内だけで販売しており、「ここだけ」でしか購入できない限定商品である。「ツェルマットは山奥にある、なかなか行けない地域」ということに

価値を見出し、スイス国内の都市部で買える同じ商品でも、そのマークを付けることで商品価値を高めている。また、お土産店によっては、購入した商品に名前等を刻印するサービスも行っており、その商品に「あなただけ」という付加価値をつけている。

【写真 3】軒下に飾られる花

⑤道案内の工夫

ツェルマット内の看板等は、目的地までの時間が明記されており【写真 4】、ルートを確認できるようになっている。また、看板にはピクトグラム[1]も一緒に描かれている【写真 5】ことが多く、言語が違ってもわかるような工夫がされていた。自然の中での観光は、場合によっては命にもかわることがあるため、必要な情報を誰もがわかるように表記することを意識している。ピクトグラム（は、鉄道やまちなかの案内など至る所で確認でき、観光客にわかりやすく情報を伝えていた。

【写真 4】観光ルート内の案内看板。目的地への到着時間が記載されている

【写真 5】鉄道にもピクトグラムが多くある。写真は自転車運搬可能のマーク。車内には自転車ラックも設置されている

[1] 特定の言語を使わず、誰にでも情報を伝えられるように簡略化されたデザイン

ツェルマットの取組は、観光客に対して、ガイドや体験による「コト」や地域・季節限定の「モノ」、サービスを通じた、地域の「いまだけ」「ここだけ」「あなただけ」の価値を提供し、満足度を高めていた。この工夫は、地域内のあらゆる場面でみられた。その結果がリピーターを生み、そのリピーターが口コミにより新規観光客を生み、ツェルマットの価値が更に高まっていくという好循環を実現していた。

マッターホルン

4. まとめ

ツェルマットの手法をにかほ市でそのまま導入することは容易ではないが、その考え方や仕組み、価値の見出し方などは参考にできるものが多くあった。

今回の調査では、地域内で観光振興や環境保全に対する意識を共有することや観光資源の価値を様々な角度から引き出すことが大切であり、住民と事業者が同じ方向に向かって取組むことが重要だと感じた。これらを踏まえ、にかほ市でも検討できそうな施策を 2 点提案したい。

（１）観光ビジョンの策定

観光振興や環境保全を実施するに当たり大切なことは、地域とともに取り組み、それを通じて住民の生活や社会を豊かにすることである。そのためには、地域のビジョン（将来像・目的・目標）を住民とともに定め、それを地域で共有し、その実現に向けて地域一体となって活動をしていくことが重要である。そこで、住民と事業者、行政の３者が対等な立場で「にかほ市観光ビジョン」を策定すること提案したい。ここで重要なことは、地域を持続可能なものとするために、行政主導ではなく、住民主導で策定することである。そのためには、観光振興に関する地域の課題等と住民が向き合い、自らを当事者と認識し、課題解決に向けて取組むことが必要だと考える。

ビジョンを策定し、地域と共有することで、観光振興の面では、事業化や事業者の連携につながり、環境保全の面では、取組の目的がより具体的なものとなり、住民への環境保全の意識づけや景観条例等との連携が深まると考える。また、住民が地域と向き合い、地域の将来について具体的に考える機会ができることで、地域への愛着や観光客を温かく迎え入れる地域になるきっかけになる。さらには、観光は住民の目に止まりやすい分野であるため、住民の意思や意見が事業等に反映されると確認でき、住民自身が観光振興の当事者であることを実感し、地域へ関与する意欲が高まることにつながる。これらの効果によ

り、地域と一体となって具体的な取組へ発展していくことが期待される。

ビジョン策定後の推進に当たっては、既存の観光協会が中心になりつつ、住民参加を実現しながら取り組むことが望ましい。理由としては、観光協会がもつ、事業者間のつながりや連携事業を実行した実績を活かすことが可能であり、また、観光協会が中心となることで、自らの組織の存在価値を高め、行政や事業者から必要とされる持続可能な組織を目指すことが期待できるからである。将来的には、地域の観光をまとめ、観光地域づくり法人（DMO）の中心として活動することを期待したい。

（２）ガイドについて

地域内の限りある観光資源の価値を高め、観光客の満足度やリピート意欲を高めるには、観光資源の付加価値を高め、「いまだけ」「ここだけ」「あなただけ」の体験を観光客に提供することが重要である。この体験を提供するためには、ツェルマットのようなガイドの案内が必要であると考える。それは前述したとおり、観光資源にガイドとの出会いやその時だけの案内という付加価値を付けることができるからである。にかほ市で活動しているジオガイドの多くは、地元住民の観光ガイド経験者であり、地域のお店や観光スポットにも精通している。筆者がジオガイドの方から案内いただいた際には、幅広い分野の知識や丁寧な案内に感銘を受けたことから、観光ガイドとしても十分活動できると感じている。ジオガイドは、ジオサイト[2]を案内し、ジオパークが進める環境保全や維持の普及を図ることを目的に活動している。しかし、ジオパークの活動はニッチな分野でもあるため知っている人は少なく、ジオパークはこれからも多くの人に普及を図っていく必要がある。この普及を図るためには、ジオパークを多くの人に体験してもらい、さらに、前述した優れたガイドを通して、良さを知ってもらう機会の創出が必要であると考える。そこで、地域資源に付加価値を付けることとジオパークの普及を図ることを目的に、ジオガイドを観光ガイドとしても生かすことを提案したい。

観光は、誰もが気軽にできるものであることから、観光という広い入口からジオパークに触れてもらえるようにしていくことが重要である。観光案内をしながらも、ジオパークについても説明できれば、観光客にジオパークに知ってもらうきっかけになる。また、ジオガイドの需要よりも観光ガイドの需要が高いため、ジオガイドが観光ガイドとしても活動できれば、ガイドする経験を多く積むことができ、ガイドの質向上にもつながることが期待される。

また、ガイドと利用者の階級（初級・中級・上級）わけを行う。初級には観光的な要素を多く含みながらも初歩的なジオ知識を盛り込み、中級には長時間のコース、上級はジオに関する専門的な案内を行う。これにより、利用者が求める案内とガイドのマッチングを容易にし、ガイドを利用したい人のハードルを下げることや利用者が「次は上の階級を利用

[2] ジオパーク内にある「見どころ」

したい」などのリピート意欲につながることが期待される。そして、利用者の階級があがるに連れてジオパークに関係する人、知る人が増え、普及につながると考える。

さらに、ガイドの階級に応じてガイド料金に差をつける。これにより、ガイドの案内意欲や質の向上につなげる。ガイド料金については、仕事として持続可能なものとするために、上級ガイドは高く料金を設定してよいと考える。ガイドの担い手が自ら学んで知識を得て、それを誰かにわかりやすく伝えるという行為は観光資源としてもっと評価されてよいものであり、高い対価を得てもよいものだと考える。これからガイドを目指す担い手に、ガイドという仕事に魅力を感じ、長く続けてもらうためには、活動内容だけではなく、稼ぐ力も必要である。将来的には、アウトドア企業との連携によるアウトドアアクティビティガイドにも同様に運営し、利用者が求める内容とガイドをマッチングさせることで、初心者から上級者まで楽しめる、リピート意欲が高まる内容を提供できると考える。

5. おわりに

今回の調査では、ツェルマット住民の表情や行動から地域への愛着や想いを感じた。これは、住民自身が心の豊かな生活をしている証だと思う。観光とは、その地域の「光」を「観る」ことだ。その「光」とは、地域資源だけではなく、その地域資源を活かし、住民が豊かに暮らし、輝いていることでもある。その住民の豊かな暮らしを「観る」人が集まることで、観光地へとつながっていくと考える。ツェルマットでは、それが実現されており、目指す地域としてとても参考になるものだった。

観光事業においては、地域外の人をいかに地域に呼び込むかということに目が向きがちである。しかし、地域内の人、住民に目を向け、地域の豊かな暮らしを実現することこそが人を呼び込むことにつながるのではないか。観光は、豊かな暮らしの延長上にあり、観光はあくまで、住民と社会をより豊かにする手段でしかない。住民の豊かさとはなにかを住民と共有し合い、そのビジョンを描き、実現の手段として観光振興や環境保全事業に取り組むことが大切である。その豊かさを実現することができれば、住民の地域への愛着を育み、地域を持続可能なものにしていくはずである。

最後に、海外調査研究の機会を提供してくださった、派遣元のにかほ市と一般財団法人地域活性化センター、本調査にご協力いただいたすべての皆様に感謝を申し上げ、本報告書の結びとする。

6.参考文献・参考資料

・ツェルマット位置図　出展：スイス旅行専門・スイスツアーズ(株式会社パルテンツァ)
https://www.swisstours.jp/area_zermatt.html
・観光庁「観光立国推進基本計画」
https://www.mlit.go.jp/kankocho/kankorikkoku/kihonkeikaku.html
・秋田県にかほ市「景観計画」
https://www.city.nikaho.akita.jp/soshikikarasagasu/kensetsuka/toshikeikaku/keikan/index.html
・新潮新書「観光立国の正体」著書　藻谷 浩介　山田 桂一郎